

平成 29 年度 第 3 回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日 時：平成 29 年 11 月 21 日（火）18：30～

会 場：練馬区役所本庁舎地下多目的会議室

1. 事務局長挨拶

こんばんは。今回は、平成 29 年度 第 3 回策定推進評価委員会となる。6 月の第 1 回の委員会で、第 4 次地域福祉活動計画の評価（以下、第 4 次計画）、第 5 次地域福祉活動計画（以下、第 5 次計画）に向けての報告となったが、十分な議論ができず、9 月に第 2 回としてワークショップを行った。今回は、その議論を踏まえた内容の報告をしたいと考えている。議論の経過も含めて資料をまとめてあるが、さらに委員のみなさんと議論を深めていきたいと考えている。よろしくお願いします。

【報告事項】

昨年度までの元委員長が 11 月にご逝去された。

平成 16 年に委員長を依頼したが、当時は「策定委員会」という名称であり、「計画を策定するだけではなく、自分たちできちんと評価できる委員会でないとならない」と言われ、「策定・推進評価委員会」に名称を変更した。

元委員長は、「地域福祉の地は地酒の地」と話し、その土地で、その土地のお酒を飲み、その土地に触れ、その土地の人と語り合う、それが地域福祉だと教えられた。病気になる前は、この委員会の後は必ず食事に行き、会議の続きや様々な話をした。

元委員長は、多くの社会福祉協議会や自治体の計画策定や国の委員会に携わっていたが、練馬区社会福祉協議会の計画策定は、任せられる委員や職員がいるから大丈夫だと、昨年ご退任された。次の計画策定は、市民を中心に計画を立てていくのが良いということで、現委員長にお願いしている。

亡くなる 2 週間前にいただいたメールには、「練馬区社協の方向性は間違っていないから、そのまま進みなさい」とあった。本日は 2005 年に元委員長が執筆された論文を配布した。改めて読み直すと、方向性は間違っていなかったと確認できた。

また、元委員長は、「怒りを持てるように、おかしいと言えるように」と話していた。元委員長の遺志を受けついでみなさんと地域福祉を進めていきたいと思っている。

2. 配布資料確認

3. 「第 2 回策定・推進評価委員会のまとめと第 5 次活動計画策定に向けて」資料 1

- ・平成 29 年度は、第 4 次地域福祉活動計画（平成 27 年度～31 年度）の中間年に当たり、また、平成 30 年度の練馬区社会福祉協議会と練馬区障害者就労促進協会の統合に向けて、年度当初より第 4 次地域福祉活動計画の振り返りと第 5 次地域福祉活動計画の方針について、検討を進めてきた。
- ・平成 29 年度第 1 回策定・推進評価委員会（6 月開催）では、第 4 次計画中間評価および第 5 次計画に向けた方向性を事務局から示したが、意見交換をする時間が十分に取れず、職員間での現状把握と情報共有を行うための議論を重ね、9 月に第 2 回策定・推進評価委員会を開催し、委員と職員でグループ討議を行った。
- ・資料 1 は、第 2 回策定・推進評価委員会の内容と事務局での検討内容を踏まえてまとめている。資料の見方は、「・」が第 2 回策定・推進評価委員会での発言の抜粋、「⇒」が第 5 次計画に向けての方向性となっている。

1. 「小地域福祉活動の推進」を柱に

(1) ネリーズと地域福祉コーディネーターが協働して小地域福祉活動を推進

- ・国の施策「我が事・丸ごと」の地域づくりを推進する取り組みが打ち出され、ネリーズは「自分で見つけた地域の課題を同じ地域に住んでいる自分たちの課題だと考え、より主体的に実感しながら進めている」ことに違いがあることを第 1 回および第 2 回策定・推進評価委員会で改めて確認した。
- ・ネリーズの取り組みを続けていき、住民が発見した地域課題に気づき、共有し、それぞれができることに取り組み、お互いに顔が見え、つながりのある地域を住民のみなさんと一緒に作れるよう取り組んでいきたい。また、住民のみなさんと地域福祉コーディネーターと一緒に課題を見つけ、取り組んでいきたい。

(2) 「ネリーズ運動」の推進

- ・「懇談会をゆるやかに続けていくこと」「活動している人だけではなく、自分がやりたいことをする自分サイズのネリーズを進めていくこと」「地域で眠っている人たちを掘り起こしていくこと」などがグループ討議で挙げられた。
- ・ネリーズは、気づいたことや知り得たことなどを周囲のみなさんに広げていくことが大事で、「ネリーズマインド」が広がるのが地域を耕していくことになる考える。
- ・いろいろな層に働きかけるために懇談会の工夫やイベント、まだ出会えていない人たちと会うためにどのような働きかけや工夫をすると良いか検討していく。

(3) コーディネーターの役割を担う住民とともに小地域福祉活動を推進

- ・第 3 次地域福祉活動計画では、地域福祉コーディネーターが顔の見える範囲で住民リーダーとともに小地域福祉活動を推進していくことを想定していた。計画が進むにつれ、小地域福祉活動は、住民リーダーだけでなく、高齢者、障害者、子どもなどに関係なく、日々の暮らしの中で、近所の人たちとつながっていくことで緩やかに見守りあい、暮らしやすい地域づくりをしている皆さん全てが関わっていることが分かった。
- ・第 4 次地域福祉活動計画では、暮らしやすい地域づくりを目指しているみなさんの動きを見える形にした地域福祉協働推進員（ネリーズ）を推進している。その中で、地域を「なんとかしたい」と考え、課題を「もっと身近に」「早く」見つけ、自ら活動や団体を立ち上げ、地域や住民をつなげることができる住民の存在に気づき、このようなコーディネーターの役割を担う住民と地域福祉コーディネーターとの協働が大事であると考え、ネリーズ勉強会の企画会議で確認を行っている。

2. 就労促進協会との統合に伴う円滑な組織改編と組織運営

- ・平成 30 年度の統合により、障害者就労促進協会のノウハウと、お互いの強み、良さを生かして新事業を実施していきたい。

(委員からの意見)

委員長：これから委員のみなさんにご意見を伺う。小地域福祉活動を推進していくこと、ネリーズ運動を推進していくことについては、これまでも議論を重ねてきているので、この方向性については、みなさん疑問はないと考えてよろしいか。そしてさらに推進していくために具体的な次なる仕掛け、アイデア、方法など、どのようにすればネリーズが広がっていくかなど話していただきたい。また、説明の中にもあったが、住民とのつながり方など、委員のみなさんそれぞれのフィールドですでに住民とつながった経験などを踏まえながら、アイデアや工夫などをお話していただきたい。

副委員長：大勢で集まると進め方が分からなくなるので、少人数で勉強会の企画会を行った。委員長の近くにいっても、じっくりと話を聞く機会がなく、今回話を聞いて、主体性について気が付いた。

子育てに関する機関を利用するタイプの人と、「ねりま子育てネットワーク」に集まってくる人の違いは何かと考え、用意されたものを利用するだけでは飽き足りず、もっと自分たちが求めているものを創っていくことで、自分たちの求めているものを満たしていく、そういうものを求めている人たちがたくさんいる、そういう点が主体性、自発性なんだと感じた。では、ネリーズはどうしていくと良いのか、主体性、自発性を考えたときに、なんでも用意され、お客様にしてしまうのは、いけないのではないかと感じた。そのあたりも深められたらよいと思う。

委員：この方針については、意義を唱える必要はなく、これまで積み重ねの延長の中に位置づいていると思う。そのうえで、忘れてはいけない観点として、2つ申し上げたい。1つは、「住民の参加」「住民主体」という言葉がキャッチフレーズのようにいろいろなところに使われていると思うが、その中身は何かを問われていると思う。住民が主体的に問題解決をするのは素晴らしいことのように思えるが、一方で、公的なサービスをきちんと使いこなしていくことが今はとても難しくなってきたのではないかと思う。なぜかという、手続きやサービスのメニューがたくさんできてきていて、しかしながら、本当にそのサービスを必要としている人たちがそのサービスにたどり着くまでに様々なものを超えていかなければならないということ、それから、社会全体が変わっている、たとえばいろいろなお知らせの媒体などが、ホームページやSNSなど新しい機器を通じてということが大きいと思う。これらは便利なツールであるが、頼りすぎてしまうと欠落してしまうものがあり得るということである。住民が参加して、あるいは、住民が作り上げていく活動というのは、その解決まですべて住民だけであるという話ではないだろうと思っている。住民が参加することによって、公的な制度などによっていくサービスそのものがさらによくなっていく、住民が声を上げることによって、制度をよくしていくような側面も決して忘れてはいけないということである。

もう1点は、住民が主体的に活動するいろいろな側面で、専門職がその役割を果たすことが大事だと思っている。社協でいうと、住民の方たちが活動できる場をどう作っていくかという専門性もあるが、福祉サービスの利用や福祉サービスを使ってさまざまな課題を解決していくところで、窓口が細分化されているため、これらをどのように利用者側に立って、もう一度再編していくかということが専門職として課題であると思う。そのあたりに関わっていくことを地域住民が主体になって進めていく地域福祉活動だからこそきちんと大切にしていかなければと思った。

委員：団体の代表として、ネットワークに参加することがあったり、発達障害関係の集まりや子育て支援のネットワークに参加することがある。そのような時は、代表として出席している。代表に集まる情報は多いが、それが会員や周りにいるメンバーやボランティアに伝わりにくいという現状がある。説明の中にコミュニティーワーカーを掘り起こすとあったが、この掘り起こしがとても大事だと思う。そのためには、代表ではなく他のメンバーがネットワークに参加することもよいのではないかと思う。いろいろな地域の活動の集まりは決まった人たちの集まりが多く、そうでない人も集まりの機会もあってもよいと最近思っている。一人の人に情報が集まるのではなく、情報拡散が必要で、この人に聞けば地域の情報が分かるということも大切だが、それだけでは底上げにつながらないのではないかと思う。情報の手段がいろいろな媒体になってきているのが、地域福祉に関しては、頑張ってアナログという面も大事にしていき、一人の人に集中せずに、もう少し周りの人も参加できるようにすると良いと思う。ソーシャルワーカーを育てていくということは、社協の仕事のように書かれるが、地域、ボランティアの人も心を配っていくことが重要ではないかと思う。地域にはまだまだ埋もれている素晴らしい人材がいて、地域に少し関心を持って主体的に参加できるものがあれば、もっと開花するのでは

ないかと思うことがある。地域でもっと広げていくことを委員としてもやっていければと思っている。

委員：地域の中に眠っている人材というところに目が留まった。社協に参加して間もないが、現在、DV被害者のグループをやっている。少数に見えるが実はたくさんいるという現実をどのように集めていくかということで、豊玉地域の子育て部会に女性の団体だが入ってもらった。そこで地域の地図を作ろうとしていて、その集まりで、自宅を開放している方や行き場のない母子に食事を提供する等、いろいろな活動を個人でしている方が集まっている。参加し始めたときは少なかったが、そのような団体や活動している人が増えているように感じている。その集まりの中には、地図作りということであれば若い人で得意な人がいたり、力がある人がいるということが分かった。集まりに行くことで、そのような人を掘り起こせるということを実感した。専門的な技術を持っている人は、早く進められる。その中に私たちのようなDVの相談をしているグループを入れてもらおうと、他の団体の中にあるニーズをお互いに提供しながら、パンフレットなどもお互いに置きあうなど、そのような形で広がっていく。先日、以前の勤務先のバザーで、ネリーズになりたい人はいませんかと声をかけたら、3人の方がネリーズになりたいと言ってくれた。声をかけなければ、ネリーズの取り組みや存在はわからないと思うので、地域にもっと呼びかけていかなければ、広がっていかないと感じている。そのようにして、広がっていくのかとやり方を知ったところある。

委員：緩やかに続けていくこと、まさにこれが一番大事だと思った。性急に結果を求めようとする、主体性などが損なわれていくのだろうと思う。ゆっくりやることをどう保障するかということが必要だろうと思う。「我が事・丸ごと」の地域共生社会の実現については、率直に言って胡散臭い活動だと思っている。他人のことを自分のこととして考えることが大事だが、いろんな含みなどもあったりするので、そのことにそのまま乗っかるということは危険だと思っている。地域福祉活動計画、社協の活動はどのようなことを目指したらよいか、活動計画の目標は何かと考えると、4か月ほど前に朝日新聞に認知症と家族の会の前会長のインタビュー記事があり、活動を振り返り、「自助活動というのは、当事者が勝手にやるから自助なのであり、そこに行政がいろいろと言って来るのはいかなものか。行政は公助をやってくれば、それでよい。」と書いてあった。地域福祉活動計画やネリーズの活動は、自助の活動だと思う。私たちは、この自助の活動を進めていけばよいと思っている。どこに問題があるか、誰がどこで困っているかということ、そこの掘り起しがとても大切で、そのことの解決は必ずしも私たちがやるというように考えない方がよいのではないかと思う。その中でも議論があると思うが、そのことが住民の役割ではないかと思ってる。

就労促進協会との統合については、突屈に出てきた話のように感じる。自分の法人でも障害者の就労移行支援事業を行っているが、行き詰まりを感じている。福祉分野からこのようなことをどのように活性化していくかは、大きな問題になりつつあるので、そのあたりのことを含めて、就労促進協会との統合とどのように考えていくのか、地域福祉活動計画の中で考えていくことなのか、障害者の就労支援という仕組み自体がどうかと考えると、社協だけではすまない問題なのではないかと思っている。突屈な感じがするので、もう少し課題の整理が必要ではないかと思う。

委員：方向性は同感。住民が主体的に行動していくためにはどうしたらいいか。結局、人は面倒なことはやりたがらない、事務的な面倒なことはやりたくない。いろいろな手続きでも、複雑な資料を書かないと申請できないとなど、面倒なことは避けだがる傾向があると思う。このようなことを行動経済学という。たとえば、アメリカでは、年金に入らなかった時代に、国として脱

退申請書というものを作った。年金を強制的に加入させるが、その代わりに年金をやめるための脱退申請書を作った。逆転の発想だが、年金加入書を作るのではなく、脱退申請書を作ることで、国民全員が年金に加入するシステムだった。これは年金に加入することは国にとってもお得という考え方だった。いいことであっても、面倒だからやらない、何かをしたいと思っても、人にとって面倒なことだと止まってしまうことがある。募金箱も、透明な箱だと実感がわくが、中身が見えないと実感がわからない。主体的に、体感的にできる仕組みが必要だと思う。とても難しいことだとは思いますが、取り組んでみる価値のあることだと思う。

また、障害者も高齢者も地域の人もすべてまとめて住民、行政の人も家に帰れば住民になり、公人という言葉はないのではないかと思う。国の指標はさておき、住民については、結局みんな人と人であること、それが大事なので、面倒なことがあっても、行き着くところは、人と人の本能的な心が生まれるかだと思う。障害者という言葉も、ここに障害があるということで使うのではなく、そういう個性があるという認識で取り組めば、もっと良い計画ができるのではないかと思う。

委員：ネリーズの運動については、否定的ではない。一区民として見た時に、区の中での福祉活動で、住民が意識をもって活動していることが、行政的に細分化されている。そのテーマが協働や共生というもので、それを誰がコーディネートするか、たとえば、介護の場面で、地域包括支援センターに介護と医療の協働ということが言われているが、どこかに心配事を相談しようとしても、細分化されすぎてどこに行けばいいかわからなくなる。ネリーズ運動はいいが、ネリーズになって、例えばオレンジリングを持ったが、何をしたかという状況になってしまっただけは残念だと思う。それは、同じような仕掛けを細分化された中でしようとしているのではないかと思う。そこをうまく連携するか、連携しなくても社協独自の運動だということであれば、それをうまく成功事例として作ってほしいと思う。成果として見せて欲しい。ネリーズが、何人増えたか、目標通りに人が集まったということではなく、参加した方が、地元や家庭で何をしたかということが成果となる。ネリーズ運動の最後の成果が何かということを確認にして、そこから逆算してネリーズ運動を具体的にこうしたいというプランを見える形でしてほしい。また、ネリーズ運動とコーディネーターの役割の住民とともにという説明が私の中ではリンクしない。ネリーズはほんわかとしたイメージがあり、ようやく自分の中に合った思いがネリーズになることでわいてきて、きっといつか何かできるのかというような感じの捉え方をしている。そこからコーディネーターの役割の住民といふところまでリンクしない。私もいろいろなボランティア活動や団体に参加しているが、それだけ活動しているからこういうことができるかもしれないが、このコーディネーターの役割の住民が決してネリーズではない、ネリーズになったらそうなるのか、その辺がはっきりしないので、明確にしてほしい。必ずしもネリーズとリンクしなくてもよいのではと思う。

ボランティア活動をするきっかけは、パワーアップカレッジで、障害者の就労の勉強をしたことがきっかけだった。障害者の就労がどういうものなのか、現役の時は企業で働いていて、障害のある方を雇うという経験もあり、そこでコーディネートする役割の社員が必要だということもわかっている。就労促進協会も今までそういうことをやっていなかったということではないが、その成果が見えないので、その評価を見えるようにしていき、何が足りないのか具体的に検討してほしい。障害がなくても就職が大変なご時勢、しっかりと結果を見せて検討していくところを見せてほしいと思う。

委員：「自分たちの課題と捉え、自身が気づき、自分たちにできることを少しでも増やしていこう」という人が実際にいてくれて、私たちの活動が成り立っていると感じている。それがなぜ実現で

きているのかということ、誰のためにやっているのかということがはっきりしているということが重要なのではないか。地域には様々な課題があり、我々が見ている子供でも、貧困や発達障害などいろいろなことがあり、高齢者の問題でも細分化されていると思う。ネリーズについては、突然「ネリーズになりませんか」と言われても、最初は「何のことだろう」と思う。ネリーズになるとしても、紹介からでないハードルが高いのではないかと思った。ただ、地域のために何かしたいと思っている人は、潜在的にたくさんいると思う。他に参加している活動でも、オープンスペースの場を作っていて、そこに何かテーマを設けて初心者からプロの方まで集まれる会をやっている。ワールドプレスやウェブ系の話だが、そこに一つの話があり、初心者からプロの人たちが集まって、今日はこの先生の話聞きましょ、誰でも参加してもよい、興味のある人は参加してよいということを毎月必ずやっている。ネリーズや地域福祉に参加したいという人が必ず定期的にやる中で、輪ができ、繰り返し行うことで、その参加者の中から「こういった課題に向き合いたい」「こういったことができる」という人材、リソースが集まるとネリーズが機能していくのではないかと感じた。そこに、コーディネーターの存在が大切で、誰かと誰かの気持ちをつなげるとこういう役割や活動があるということ、それをネリーズかもしれないし、行政の方がつなぐのかもしれないと思った。ネリーズは、おそらく主体的に何かを常に問題意識を持って取り組んでいる人が、より多くの人たちに啓蒙したり、仲間を増やしていくというヒーターの役割なのだろう。ネリーズとコーディネーターを分け認識していたので、コーディネーターというのは、行政のリソースになかなかとどり着けない人や問題に取り組んでいる人たちでも対価がなくてどう相談や活用したらよいかのかわからない人も議員などに相談すると止まってしまうこともあるので、そう行けばこうなるというフォーマットがあるようなので、それをこういった私たちの活動にうまくつながるような仕組みができていくと地域の課題が進んでいくのではないかと感じた。

委員：相談情報広場や食のホットサロン、子ども食堂などをやっているが、そこに参加した方にネリーズの紹介をし、説明して、登録していただくことが多い。ネリーズになっても、その先に何をしたらよいかのかわからないという人が多い。まちづくりネットとして、地域の高齢者施設、障害者施設、学校などにつながっているが、ネリーズを紹介してもうまくつながらないと感じている。学校は、障害のことなど授業に役立てることなどが多いと思うが、そこうまくつながらず、他のこととつながって何かをやるということがある。そのようなコーディネート的な役割をネリーズにもやっていただいている。小地域福祉活動のコーディネーターとなるとまた別で、コーディネーターがいつもいるわけではなく、その都度ネリーズにお願いしている状況で、ボランティアコーナーを通してやりたいことを甘えさせてもらっている。直接お店にきた方と学校などが進めている状況。これから先、どのようにネリーズ運動を進めていくか、手詰まり感を感じている状況がある。

委員：区としては、社協が進めていく小地域福祉活動を支えていく立場であるので、ネリーズの活動を進めていくことについては、感謝している。このまま進めていただきたい、区としてバックアップしていきたいと考えている。難しいのは、ネリーズの数が増えればよいという話ではなく、登録が増えることは分かりやすい指標ではあるが、必ずしも成果指標ではないということ。数が増えてもバッジを持っているだけでは意味がない。ネリーズが増えることによって、どのように地域がみんなにとって住みやすいものになるのか、難しい成果指標ではあるが明らかにすることが必要。必ずしも人数だけではないと思っている。ネリーズに登録する方たちの思いやきっかけとして登録するのかということが、「面倒なことはやらない」「生きていくうえでの自己実現のため」などの話としてあったが、自分が楽しい、人の役に立つことがうれしい、自

分がやりたいと思うことで地域の役に立てることというのが一番良いと思うが、それがそのままネリーズの本意なのかどうかというのは難しい。ネリーズに誘われて登録してもらうことはありがたいが、だからといってそこに過大な期待をしてしまっはいけないと思う。せっかくなっていたのだから、できるだけ仲間として一緒にやっていると良いと思う。ネリーズひとりひとりの思いで、きっかけやできることはそれぞれ違うが、やりがいや楽しさを感じてもらいながら、小地域福祉活動が良い方向に進んでいくと良いと思う。中には、コーディネーターの役目を担うことができたり、そこにやりがいを感じるネリーズもいると思うが、本当にささやかに自分ができることを役に立てたらよいと思い、いつもではないけれど、ちょっと役に立てればという人もいるので、ネリーズを一言で括ることは難しいと感じている。一人一人のネリーズとつながって、良い方向に進んでいくことを区としても支援していきたいと思っている。

委員：この説明の中でキーワードと考えるのは、ネリーズマインドを持って、主体的に地域を耕すこと、人の心を耕すことである。人間は千差万別で好きなことをやっている。もう一つキーワードとして入れてほしいことは、元委員長の話の中にあつた、地酒を飲んで、地域の人と語るということも大事なキーワードだと思う。もう一つ大切なことは、行政の枠を外すこと。具体的には、町会長をやっていて、先日芋煮会をやった、お酒を飲んでにぎやかにすることが好きなので、主体的にやった。社協の職員を誘い 2 人が参加した。会合に参加して、みんなが楽しい思いをすることがみんなの心を耕すことだと思う。職員が「仕事なので、飲めない」と言ったが、「私に呼ばれてこの席に参加したのならば、飲むことが仕事」だと言った。みんなと楽しく話をするのが心を耕すことになる。その中で、問題や困っていることを話さずと思う。そのためには、一緒に楽しむことが大事。そう意味では、その局面に入ったら、楽しむことが仕事だと思う。行政の枠を外すということはそういうことだと思う。行政という枠を背負っていると、自分がしていることが気になり、心を閉ざし、裸になれないのだと思う。人の心を耕すということは、自分が心を開かないといけない、行政の肩書を持っていると心を開けない、主体的にネリーズマインドを持つということは、行政の枠を外すことが大切である。人の心を耕すためには、心を開いて語り合うこと、人の心はそういうものだと思う。ネリーズマインドを持つということは、好きなことでないといけない、嫌いなことでは持てるはずもない。千差万別、それぞれいろいろな特徴を持っているので、好きな方向に向かわせること。行政の肩書を外して本音で語り合うこと、それが良いことだと思う。第 5 次計画の方向は、よくできていると思うが、そのためには、それらのことを実行に移すことだと思う。

委員：第 5 次計画に向けて、資料に掲げている、3 つを推進することによって、私たちが考えなければいけないのは、小地域活動が進んだ後の地域の姿を思い描いていくことだと思った。その中で、コーディネーターの役割を担う住民のイメージと地域福祉コーディネーターとの違いが前回の議論の中でもあつたが、イメージが沸きにくいところであつたと思う。そのような住民が、「役割を担う」という部分にひっかりを感じる。何を推進していくのかという点では、以前から副委員長が言っているように、受け手や支え手で分かれるのではなく、また受け手側にではなく地域に課題があり、その地域の課題を受け手であろうとも支え手であろうとも解決を一緒にしていくというイメージができると良いと思う。困っている人がいるということで、制度上は困っている人を助けるサービスを提供するということになるが、制度のはざまに対応していくということ、制度があるから制度のはざまがあるということだけでなく、究極的には、地域の課題を解決していくために使える制度がある、制度があるから制度のはざまがあるという順番よりも、解決したい課題があり、解決するために制度を使い、制度でないものも使うということが、小地域福祉活動の

イメージの中に少しずつ私たち自身が作っていくしかないのかと思っている。

委員：皆さんに意見を伺ったが、コーディネーターについての補足を。

職員：まず、委員の投げかけについて、事務局の考えを伝えたい。成果を明確にして、到達点を決めてから進めていくという話があった。それに対し、委員が3つをどう推進していくかということは事務局が考えることではなく、推進された姿をみんなで思い描いていく、委員長からもどのような街にしたいか考えていくのが成果と捉えているのはわかりにくいので、みなさんでそれぞれどんな街にしたいか出してきたのだと思う。ネリーズ運動とコーディネーターというのは、リンクしないように感じるとのことだったが、小地域福祉活動の推進というものを第5次計画でも進めていきたい、第3次計画から小さいエリアの中で、お互いに顔の見える範囲で地域福祉活動を進めていこうと進めてきた方法として、地域福祉コーディネーターを配置する、第4次計画ではネリーズという存在をクローズアップしようと進めてきた。小地域福祉活動の推進の中で、地域福祉コーディネーターを配置した。ネリーズを進めるだけでは足りないということで、住民の中にコーディネーターの役割をしている人がまだまだいる、私たちが見えないところでたくさん活躍している人がいる、そういう人たちと一緒に小地域福祉活動を進めていきたいというように、徐々に至ってきた。ネリーズの人がそのままコーディネーターになるというわけではない。ネリーズ運動が、コーディネーターになると言っているのではなく、小地域福祉活動の推進ということを進めていく中で、第3次、第4次、第5次計画とだんだんと明確になってきたのではないかという投げかけを今回のまとめでしている。地域にはもっと活躍している方がいる、その方たちを発掘する方法がある、場を設けるとそのような人が集まってくる、力を持ってる人がいたということを知る機会にもなり、そのようにコーディネーションしている人がいるということネリーズ運動やコーディネーターの話をクローズアップして第5次計画に載せていきたいと思っている。ネリーズを何人に増やしていきたいという目標よりは、ネリーズマインドを増やすことが大切。去年のシンポジウムで、きららのメンバーが、「何かしたいと思ってネリーズに登録したが、何をしてよいかわからなかったが、カバンにネリーズバッジをつけることで、これは何かと聞かれ、自分が気が付いたことを発信していくことだと人に話していくうちに、これが自分の役割なんだと気が付いた、これが自分にとってのネリーズなんだと思った。」あの発信がまさにネリーズマインドなんだと思い、そのようなことを思う人が増えることが必要だということ伝えられたら良いと思う。

委員：ネリーズの存在が、たとえば、パワカレの仲間ですらやっている活動が広がっていく中で、活動を担うスタッフに育ちあがったというよりは、スタッフをやりたいか、やりたくなったということで参加し始めている人がいる。思いを持ってそこに参加しているスタッフとしてやりたいと思っていたとやり始めた人がいる。最初に思いは出ないが、その場に参加して、楽しく過ごしたいと参加しているうちに、スタッフとしてやりたくなるというようなことが、ネリーズマインドが育って何かをやっていくということなのかと思う。もう一つは、たとえば、「介護活動に行っている」「障害者施設で作業のボランティアをしている」という話をしているが、共通の話題がなくても、その時にバッジを見て、ネリーズだと気付く。要するに、ネリーズということは、細分化されているボランティア活動が横串にされる共通のキーワードになる。無理にキーワードを作る必要はないが、「あなたもネリーズだったんだ」ということがほんわかと横串にされることになる。ネリーズ運動というのは、それで十分で、縦割り化、細分化されたものが人と人の中で同じような心意気でやっている仲間だと具体的に納得され、お互いに分かり、そこから他分野のこの話に進むのではないかと思う。ネリーズとして何かやるということではなく、「私がネリーズです」ということだけでお互いに確認できれば良いと思う。

委員：第 3 次地域福祉活動計画から委員会に参加していたが、就労促進協会の話が出てきた経過が分かっていないので、少し唐突感があることと、障害者の就労促進そのものが、壁にぶつかっている状況があり、その問題をもう少し掘り起していかないと地域福祉活動計画の中に入れていくことの難しさ、何をどのように議論したらよいかわからないという感じを受けている。

職員：なぜ、資料の 2 番目にあるかということ、与えられたラッキーなものと考えているからで、自ら統合しようとしていることではないかもしれないが、お互いにいい部分を活かして進めていきたいと考えている。それが統合ということで、統合するからには、良いところを活かして進めていこうと思っている。

地域福祉活動計画は、民間において地域福祉を進めていくためのもので、社会福祉協議会の事業計画ではない。地域福祉を推進していく中で、社会福祉協議会は事務局的な役割を担って、地域福祉活動計画の事務局を担っていることと同じように、社協の組織自体がどのようになっているかも組み込んできたという経過がある。第 2 次計画も、第 3 次計画も社協の経営計画のようなものも組み込んできたと思う。ボランティアセンターをボランティア・地域福祉推進センターに拡大することなど、経営計画のような部分も入っているので、統合については、地域福祉活動計画の中に入れて推進していくという枠としては、円滑に進めていかなければいけないということで入っている。

委員：組織改編があったことは分かるが、委員会での議論の積み重ねがあったわけではないということと、ところが唐突感がぬぐえないということ。統合に反対ということではなく、今まで積み重ねてきた議論の中に、統合のことをどう組み込んでいくのかがよく見えないと感じている。その点をもう少し丁寧に進めていく必要があると思う。

職員：障害者の就労促進を第 5 次計画の 2 つの柱の一つにしたいということではなく、そのようなことを行ってきた就労促進協会との統合を円滑に組織改編とすることを 2 つ目の柱に入れている。

職員：障害者の就労促進も含めて、就労促進協会との統合に唐突感か否めないということも含めて整理しながら次回以降提案できればと思う。

委員：社協の組織改編とネリーズ運動が頭の中でうまくつながっていない。ネリーズの小地域福祉活動の中に、統合の話が出てくるので唐突な感じがするのは。

職員：唐突感が出ないように、小地域福祉活動をどのように推進していくかということとは別に、第 5 次計画には避けることができない組織改編を 2 番として挙げている。このことは、培ってきた議論の結果ではない。

委員：それぞれの特徴を活かして、協力し合っていけばよいのではないかな。

委員：地域の障害者が仕事をするには、地域の協力が必要。地域の住民である障害者が電車に乗って通勤するとして、通勤中に道に迷ってしまったり、道端で立ち止まってしまうことがある。実際にあった話だが、いつも決まった時間に通り返接を交わしている利用者が、その時間に行かないことに住民が気づき、事業所の方に連絡があった。そのような例もあるので、必ずしも地域とレインボーワークが別々ということではなく、レインボーワークももっと地域に密着すると良いと思う。

委員：練馬区では、子育てネットワークのフェスがあり、そこに行く母親たちがいかに子育てについての思いを持って活動しているのかが分かる。実際に活動している人たちに、「あなたたちの活動は地域福祉です」と伝えても、驚くが、本当はその気づきが大切なのではないか。本人は、楽しいと思っているから活動をしていて、それが地域福祉につながることに気づいた時に、「それがネリーズです」と伝えると、本人が納得すると思う。今までの話の中でも、ひとくくりにネリーズと言っても、いろいろな考え方、関わりがあると思う。実際に活動している人たちに

「それってネリーズ」と伝えることも大事なのではないか、そういう意味では、私たちは、いろいろな活動をしている人に出会ったときに、「それってネリーズ」と声かけしていくと納得してもらえるかと思う。

委員：今回 3 人のネリーズの登録用紙を持ってきたが、なぜ、ネリーズに誘ったかと言うと、ネリーズのパンフレットに書いてある「こういう人がネリーズです」ということを信じて「あなたもネリーズ」だと声をかけた。意識づけと、自分がやっていることが地域のためなんだと意識を持つことが大事だと思ったことが納得できた。

4. 平成 29 年度上半期ネリーズ関係報告書等 資料 2～5

<ネリーズ懇談会>

①大泉地区（7月）会場「はつらつセンター大泉」

- ・(地域の気づきあいの視点) 仕事で忙しくこれと言って活動はしていないが、近所の高齢者の様子を見てしばらく窓が開いていないと近所の方に気づいてもらえるように話しかけている。
- ・(地域の気づきあいの視点) 活動は無理のないよう自宅から歩いて行かれる距離でと考えている。
- ・「自分サイズのネリーズ」というキーワードに合った意見交換がなされた。
- ・いろいろな地域で何かをしようと思ったが、大泉学園が一番やりやすい地域で、若い人も一緒に活動をとの意見もあり、さまざまな活動に希望と期待の抱ける懇談会となった。

②練馬地区（8月）会場「喫茶カナフ」

- ・(地域の気づきあいの視点) どんな社会でも排除される社会であってはいけない。
- ・(個別の育ちあいの視点) 誰でもつながりを求めているのではないか、ネリーズがそのきっかけになるのではないか。
- ・持ち時間が足りないほど伝えたいことが多かったのではないか、話しのあとにととても良い表情をしていた。
- ・情報を得て、気づき、学ぶことだけでなく、発信すること、伝え合うことの喜びや充実感にも着目した気づきであった。

③石神井地区（9月）会場「特別養護老人ホーム・フローラ石神井公園」

- ・(地域の気づきの視点) お揃いのベストを作って見守り活動に取り組んでいる、お揃いの服を着ることで子どもたちも気軽にあいさつができ、不審者に思われることもないのではないか。
- ・(個別の育ちあいの視点) 人だけでなく、犬や猫も仲良くなれるわんわんパトロールや子供の貧困が広く知られるようになり、つながりや挨拶が生まれ、今後も広がっていくと良いとの事例が挙げられた。
- ・ネリーズは人ではなくスピリット、自転車にお揃いの何かを付けてはどうかなど様々なアイデアを生かしながら見守り活動を充実、拡大していきたいと考えている。

④光が丘地区（9月）会場「発達支援教室あかねっこ春日町教室」

- ・(地域の気づきの視点) 「ハンバーガー屋でいつも怒っている男性に声をかけ、何度か声をかけると身なりがきれいになった」「地域を知り、何かをしたいと思い、子ども食堂を実施するまでに至った」などの事例が挙げられた。
- ・「ネリーズとしてできることをやっていきたい」「つながりはまず挨拶から」「地域を知ろう、制度を知ろう」という様々な「自分サイズ」のネリーズ運動を共有できた。
- ・ネリーズは「する」ことが目的ではなく意識することが大切、ネリーズバッジをつけることで意識するのではないか、それぞれの活動にはその方の思いがこもっているなど、自分サイズの活動に様々な思いを込めて取り組みそれを発信する懇談会となった。

<ネリーズかるた>

- ・11月21日現在、64エピソードが集まり、46音中36音のかるた文ができている。
- ・今後、イラストを付けかるたを作成していくとともに、気に入った札をプレートにして自転車に付ける、365枚集めて日めくりカレンダーとして活用するなど様々な発展的アイデアも集まっている。

<ネリーズシンポジウム>

テーマ：「災害にどうぞなえる!?～日頃のつながりが地域を守る～」

日時：平成29年12月10日（日）午後2時～5時

会場：練馬区役所本庁舎地下多目的会議室

災害について学ぶと同時に、いざという時に身近な地域で助け合うためには日ごろからどのようなことが必要か、自分でできること、準備しておくこと話しかなどを知り、考えるきっかけにしたいと考えている。

<ネリーズ登録>

- ・11月21日現在、ネリーズ登録者394名
- ・白百合福祉作業所では、毎年、石神井小学校2年生の「地域を知ろう！まちたんけん」学習を受け入れており、今年度は5名が来所した。児童がネリーズバッジに気づき、説明したところ、2名がネリーズとして登録した。ネリーズとしてやりたいことは、「公園の水道の蛇口が閉まっていなかったら閉めたいと思う」とのこと。

5. まとめ

副委員長：今日は皆さんからご意見が出て、実のある会になったかと思う。まとめではなく、私の思いになるかもしれないが、私の中には、去年の相模原の事件が心に引っかかっている。あの容疑者が特別な人だと思っている限り、障害者の問題は解決しないと思っている。自分の中にも容疑者と同じ気持ちがあるということ認めざるを得ず、私がこれまで活動を続けてきたのは、自分の中にある偏見だったので、あの容疑者だけが特別な人だとは思えないと思い、何が違うかという、私にはとても良い指摘をしてくれる当事者に会えたということが幸運で、彼はあのような障害者観しか持てないような出会いしかできずかわいそうな青年だと思っている。その時にネリーズのことを考え、自分の身近なところでいろいろな人たちと出会える関係がどんどんできていったら、もっと変わっていくきっかけがあるだろうと思う。今日、みなさんに語っていただいて、何かができるとかできないとかではなく、同じ心意気を持っている仲間がネリーズだと委員が話したが、障害の有無をこえて人と人という関係が身近なところでたくさんできていくとあのような事件は起こらなくなっていくのではないかと感じ、ネリーズを進めていきたいと改めて思っている。

6. その他【椿課長】

- 会員の集い
- 共同募金

7. 次回の日程について

日時：平成30年2月23日（金） 会場：未定

以上